
罪と罰と

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪と罰と

【Nコード】
N9556L

【作者名】
着地した鶏

【あらすじ】
大金の入ったボストンバック。そこには如何なる思惑が渦巻いているのか、それともそこには何にもないのか。偽りのサスペンスにあなたはどんな答えを出しますか？

万引き、それは非常にスリリングでエキサイティングな行為だ。

無論、小学校時代の俺はそんな犯罪まがいのこととはしたことが無いし、しようと思ったことも無い。でもただ一度だけ、友達が万引きするとき見張りのようなものをやらされたことがある。その友人は特に貧しいというわけでもなく家庭に複雑な問題があるというわけでもなかった。なのに万引きをしていた。

当時の僕にはそんな彼の気持ちがわからなかった。だけど罪を犯す彼を否定する気にはなれなかった。心のどこかで彼の中の何かを肯定していたのだ。

それが何だったのか、何故そんな気持ちを抱いたのか、それは語彙も経験も少なかった幼い俺にはわかるはずもなかった。

*

「んー、もう朝か」

カーテンの隙間から漏れ出す朝日が眩しく俺を照らす。俺はゆっくりと目を開いた。

「ずいぶん昔の夢を見ちまったな」

小学生だった俺の家庭は友人とは違い非常に複雑で波乱を伴ったものだった。親父は当時の風潮に合わせるようにして大規模なリストラに巻き込まれ、俺に暴力をふるうようになった。当然それに気づいた母親と親父の間には離婚の危機が訪れた。ゆっくりと寝れる

日、気の休まる日なんて訪れることはなかった。だけど俺は横道にそれることも無く、真っ直ぐに生きてきた。そうするしかなかった。そうこうしているうちに母親と親父は何度も心をぶつけ合い、親父は再就職先を見つけた。家族はそれぞれの心に大きな傷を残した。つつも最終的には元の平穏な状態に戻った。とどのつまり俺は苦しい中でも純粋な少年であることを守り続けたのだった。

「それが今じゃこの有様だ」

俺は布団のそばのボストンバッグに目を移す。薄汚れたよれよれのボストンバッグ、ジッパーはすでに壊れかけている。この薄ボロの中には現金で800万ほど詰め込んである。もちろん盗品だ。

*

昨日、近所の老夫婦宅に忍び込んだ、そして金を奪った。話は簡単、それだけだ。しいて言うなら思ったよりも上手くいったというくらいか。

実は、その老夫婦はかなり貯めこんでるといふ噂で、実際に侵入してみればドンピシャリだった。タンスや押入れの中に見たこともないほどの額の札束、札束、札束が隠されていた。諭吉さんがタンスの中所狭しと敷き詰められていたのだ。いかに善良な人間といえどもこれほどの金額を目にすれば眼の色を変えてしまうに違いない。まあ、善良な人間とは言えないまでも一般人である俺は夢中で諭吉さんを手に持っていた薄汚いボストンバッグに詰め込んだのだ。

俺は特別に金に困ってる、というわけではない。それでは何故こんなことをしてしまったのか？

強いて言うならそれは好奇心だろう。金持ちの老夫婦というのに興味が湧いた、ただそれだけだった。推理小説のような怨恨もなければ、練りに練った緻密な計画もない。老夫婦が外出したのを見計らって、誰にも気づかれぬよう空き巣まがいに侵入しただけだ。

こんなサスペンスがあれば全国からブライニングを食らう喰らってしまうだろう。事件はある、犯行の形跡もはつきりとしている。だけど肝心の動機が無い。そんなサスペンスは情性でテレビに漬かっているお茶の間のオバちゃんたちすらも納得させることはできない。崖に追い詰められた犯人が『何となくやりました』なんていったら地上波は大混乱の中に吞まれてしまう。

つまり俺の犯行には何の理由もなかったのだ。理由らしい理由を挙げるとすればそれは好奇心だろう。金持ちという噂が嘘でも別によかった。自分の好奇心や緊張感を刺激してくればそれでよかった。しかし噂は本当で、大量の札束を目の当たりにした俺は本能の赴くまま夢中で金をバッグに詰め込んだ。

言うならばこの理由の不透明な犯行は子供の万引きのようなものかもしれない。

今の時代、万引きをするような子供たちは飢えているわけでも金が無いわけでもない。大人たちは家庭の混乱だとかなんとか理由をつけて納得したいらしいが現実はそうもいかない。

彼らはスリルを求めているのだ。罪に触れる背徳感やゲーム感覚の好奇心。そういった刺激を求めて彼ら、彼女らは罪を犯す。今回の俺もそんな子供と同じだったのかもしれない。良心よりも目の前の甘美な悪徳を望んだ、ただそれだけだ。その悪徳は舌の上に触れると心地よく弾け、ドロドロとした甘味を俺の口に与えてくれる。甘ったるい悪徳はそれだけで悪酔いしそうなほどだったが、俺は心の底からそれを求めた、求めた。

あの純粹だった少年も今となつてはグルグルと体内で渦巻く陳腐な感情に任せて、自分から平穩を引き裂いて甘美な惡徳の香りに肩まで漬かつてしまったのだ。

*

「それにしても８００万か」

酔いが醒めるのは早い。中には惡徳の美味さを忘れられずに何度も犯行を重ねる人もいるらしいが、目の前に札束を積まれた俺はそんな酔いもすっかり醒めてしまった。

ただ俺の前には現実的ではない現実的な物質が山のように積まれていた。８００万円。流石にこれだけの金の上手い使い道は思いつかない。いくら証拠を残さないように盗んだといつても、多額の金を使えば足がつくからだ。繁華街で大名振る舞いしようにも薄汚れたヨレヨレＴシャツの若者が湯水のように金をばら撒けば、その不審さからすぐに警察の耳に入ることだろう。

「ということはちまちまと使つしかないのかね」

ため息をつきながら煙草に火を点ける。箱が随分と軽い、軽く握るとクシャツと潰れた。ペチャンコだ、一分の隙間もないほどに。どうやらこれが最後の一本らしい。俺は煙草に火をつけ煙を思いつきり灰にため込んだ。そしてゆっくりと吐き出す。白い煙が安アパートの中に広がる。最後の煙草はすぐに短くなった。短くなった煙草をそこら辺に落ちていたビールの缶にジリジリと押し付ける。

「ちよつくら煙草でも買いにいくか」

そう呟いて俺はアパートの階段をギシギシ言わせながら下り、真

っ暗な夜の闇の中、近所のコンビニへ足を早めた。

＊

「結局、盗んだ金で買ったのはこの煙草一箱だけか……」

コンビニで酒やら菓子やらも買おうとしたがどういうわけか気が引けて、結局店員に諭吉様を出して煙草を一箱だけ買っただけだった。

「結構俺も小心者なのかねえ、それとも……」

それとも、今朝の夢のせいだろうか。

まだ純粹だった小学生の頃の自分。全てが懐かしい。しかし、何処をどう間違えたのか今や俺は立派な犯罪者だ。だけど純粹だったあの頃にはもう戻れない。あの頃は苦しくとも純粹だった。いつか光が差し込むと信じて暗い世界の中でじっとしていた、何かが変わるのを、何かが訪れるのを期待と情熱を添えて待ち続けていた。しかしそんな純粹さにも俺が、この手で黒く、真っ黒に塗りつぶしてしまった。

それでも、何だかんだ言ってもやっぱり罪悪感なんてのがあるんだろうか。悪徳を、甘美を貪った貪欲な、原始的な犯罪者にも純粹だった少年の頃の良心が残っているらしい。俺は居間と現実の狭間でグルグルと行ったり来たりしている。自分の居場所がわからない。あっちにいるべきか、こっちに残るべきかそれすらもわからない。

ただ一つ言えるのは俺は子供ではないということだ。子供で無い、

精神的に一つの人間としての俺は自分の首に『罪』という名の鎌が突きつけられているのをはつきりと感じ取っている。その鎌は少しずれば俺の首などすぐに刈り取ってしまいそうだ。鎌の、その根元には死神のような者がいるのかもしれない。だけど俺には見えない。ただ黒いモヤモヤとした塊、不安、恐怖を感じるだけだ。

俺は声をあげて笑った、こんな混乱した精神には乾いた笑いが一番相応しい。自分が精神的な濁流に吞まれてしまったのははつきりとした事実だろう。だが俺はここから抜け出す術を知らない。ただ一つわかるのは小学校の頃、友人が万引きに手を染めていた理由くらいだ。

甘美な悪徳を求めた子供たちは罪を犯す。罪は甘い、一度手を染めてしまえば二度と抜け出すことは出来ないだろう。だけど、彼ら彼女らはその先にある罰を思いもしない。罪に酔い痴れ罰を忘れる。しかし、罪には必ず罰が与えられる。

『罪には罰を……』

鎌を持つ黒い塊は低く良く響く声で俺にそう語った。

＊

「よし…自首しよう」

煙草を吸い終わるとボストンバッグをまとめ、出かける支度をする。

急にそんなことを言いだすに至ったのならは何も先ほどの道徳感から生み出された死神の一言からだけではなかった。ただ単純に俺はこれだけの金を手にした意味を見失っていたのだ。パーツと漬かってしまうほどの度胸のある人間なら良かった。だが、自分の中で確実に大きくなっていく罪の意識というものは俺をそこまで

の犯罪者にさせてくれないようだ。自分からも否定された俺はもはやこの札束に掴まる力すらも残されていないのだ。

誰か、俺を裁いてくれ、そして自由にしてくれ。奇妙な袋小路に迷い込んでしまった俺は、精神的な脆さに気づいてしまった俺は自分以外の誰かになんとかしてもらうしかない、そう思った。

「よし、警察に行つて正直に話そう。そして……」

罰を受けよう。

もしかするとこれは逃げなのかもしれない。自分の罪に面と向かうことのできない、そんな現実逃避なのかもしれない。だがこの際逃げでも何でもいい、とにかく何か行動を起こさなければこの泥沼な精神状況からは抜け出すことはできない。とにかく俺は意を決してドアを開けた。

「あ」

「あ」

さっそく出鼻を挫かれた。ドアを開けるとそこにはちょうど俺の部屋のチャイムを押そうとしていた中年のオッサンが立っていた。オッサンは鳩が豆鉄砲を喰らったみたいな顔をしていたが俺もそんな顔で驚いていたのだらう。

「何ですか」

「いや、ちよつとね。あんたが〇??さん?」

そう言つとオッサンは懷から手帳を取り出した。

「け、警察う!？」

オッサンの手帳には鈍った俺の目にもわかるくらいの金色の桜大門がギラギラと鋭い輝きを放っていた。

*

何とも不可解なことになってしまった。この状況はどう説明したらいいんだろうか。とりあえず俺の目の前には美味しそうなカツ丼がホカホカと温かそうな湯気を立てている。そして湯気の向こうにはやる気のなさそうな警官がプカプカと煙草をふかしている。

まあ、わかっていることをまとめてみるとだ、俺が警察に行こうとしたあの時、なんと真っ白なパトカーであちらの方からお迎えが来やがったのだ。

〈数十分前〉

「警察が何か？」

「まあ、お前さんを捕まえに来たんだがな。逮捕だよ、タイホ」

「ええと、こつちも今から自首しようと思ってたところなんすけどね。タイミングが悪いというか何と言うか」

「おお、そうか。なら話が早い。タイミングなんてどうでもいいさ、どつちにしろ結果は同じなんだからな。ささ、早くパトカーに乗った乗った」

～現在～

「待たせたな、じゃあ調書取るぞ」

「ちよつとその前に質問いいですか？」

「何だ？」

「何で俺が犯人だって分かったんです？」

そう、何故警察は俺が犯人だと特定できたのか？

いくら何の計画性も無い犯行とはいえ老夫婦宅には何の証拠も残してないはず。俺は楽しさを半減させまいとそれなりに徹底した犯罪を作りだしたのだ。指紋はもちろん髪の毛も残さないようにしたのだ。それに人通りの全く無い時間帯に忍び込んだのだから目撃者もいるはずがない。

しかし、警察は俺が犯人ということを突き止めた。俺はこの理由が知りたかった。

「何でそんなこと知りたいんだ？」

「いえ、単に好奇心からです。俺の犯行は完璧だったはずです。そんじょそこらの警官に解決できるはずがない」

そう、これもまたただの好奇心。老夫婦宅に忍び込んだときと同じように本能から湧き出てくる好奇心に俺はまた染まろうとしている。

「ふーん、完璧な犯罪ね。随分言ってくれるじゃないの」

やる気のない刑事は煙草を灰皿にグリグリと押し付けて、乾いた眼で俺を睨んだ。馬鹿にするなよ糞餓鬼が、その目はたしかにそう言っていた。路傍の石に怒りを露わにしたような目で俺を見たのだ。

「まあ、いいか。お前さんの自信がどこから来るのかはわからないが教えよう。いやなに、完璧に特定できたわけじゃないんだがな。手がかりは、そう君の近所のコンビニの店員だよ」

「コンビニの店員!？」

「そうさ、彼が通報してくれたんだ。犯人はお前だつてね」

これは予想外だった。あのコンビニは老夫婦宅とはちょうど真逆の方向に位置している。犯行後、俺は真っ直ぐに家に帰ったはずだ。だからコンビニの店員が俺の犯行を知ってるはずが無い。俺の犯行には全くあのコンビニは関与していないのだから。

*

「何で俺の盗みをコンビニの店員が知ってるんだ」

「はあ?盗み?」

「俺が老夫婦宅から800万盗み出したから俺を捕まえたんだろ? 何でそれをコンビニの店員なんかが……」

俺は声を荒げた。そして啓示に詰めよった。何故だ、何故だ俺の犯行は完璧だったはず。それが何で全く関係のないコンビニの店員が知っているんだ、俺が800万を奪ったことを。

「ちょ、ちょっと待て。老夫婦?800万?いったい何のことだ。そんな被害届は出てないぞ」

「え!?! じゃあ何で俺は……」

「ちょっと黙つてろ、今仲間をその老夫婦宅に向かわせた」

全く以って不可解だった。

警察側は俺の窃盗事件は全く知らない。老夫婦からは被害届は出ていない。

なら、何で警察は俺を捕まえに来たのか。

何も分からないまま俺は取調室で待たされた。

*

数十分後、さっきの刑事が仲間と連絡を取り終えてバタバタと戻ってきた。

「なかなか面倒臭い事になったもんだぜ」

「刑事さん、いい加減教えてくれませんか。何で俺が捕まったのかを」

「んー、そうだな、ごちゃごちゃしてて何から話せばいいか…」

そう言つと刑事さんは煙草を一本取り出して煙を肺の奥まで大きく吸い込む。そしてゆっくりと白煙を体から吹き出した。

「単刀直入に言つとな、お前が盗みに入つた老夫婦がいるだろ？」

「ええ」

「あれな、偽札作つてたんだわ」

「へえ、偽札ですか。なるほど偽札ね……つて偽札う！？」

俺は刑事さんが戻ってくるまでにガつついていたカツ丼を吹き出した。刑事さんの顔にべつたりとカツ丼の残骸がついてしまったので刑事さんは舌打ちをしながらそれを拭き取る。そして俺を睨みつける。だが俺はそんなことに気にかけるほどの余裕はない。

もう何が何だか分からない。予想外のことが起こりすぎて俺のちっぽけな頭脳の処理速度はとつくの昔に限界を振りきっている。

「偽札ですか」

「そうだ、偽札だ。お前さん今日の昼頃コンビニに買い物に行つたろ？煙草一箱を買ったために1万円出して。コンビニの店員はそんなお前と、お前の支払った諭吉さんに違和感を感じたらしい。警察に通報したそうだ」

刑事さんは手にしたコンビニのレシートをぐしゃぐしゃに握りつぶしてから机の上に転がした。

「それで俺は偽札作りの犯人に疑われたんですね」

「その通り。そして老夫婦のことだが、被害届なんか出したら偽札作ってたのがバレちまうからな。盗まれた800万は全て偽札だ。あれが一度に外に出回ればヤバイことになると思つたのかは知らないが、あいつらを家宅捜査したとき老夫婦は夜逃げの準備をしてたわけだ。傑作だろ」

刑事さんは笑ってみせるが俺はどうにもその笑顔に応えられそうにない。ぎこちない愛想笑いを作ることさえできないのだ。

「つまり老夫婦からは被害届は出てなつたか」と

「そういうことだ。どうだ、これで満足か？」

「ええ、一応は」

煙草を灰皿に押しつけながら刑事さんはため息をつく。新しい煙草を出す様子はない。

「ま、お前さんのおかげで偽札判も捕まっただし自首だからそこまで重い刑罰にはならないと思うがな。まあ、これは特殊なケースだから正直、お前さんがどう転ぶかなんてのは俺にもわからんわけだ」
「そうですか……」

「それにしても、お前も変わったヤツだよ。偽札と知らなかったならドーンと使っちゃえばよかったのに。結局買ったのは煙草一箱だからな」

刑事さんは憐れむような目で俺を見る。所詮、この人には俺の心の中あの葛藤はわからないんだろう。あのグルグルと渦巻く黒い何かをこの人は知らないのだ。

「自分でも変なやつだと思ってますよ」

「ふっ、なるほど確かに変なヤツだ」

そう言うつと刑事は調書をたたみ取調室を出ようとした。

「えーと、調書はいいんですか？」

「ん、ああ、今回の事件は偽札犯の方が重要だから先にそっちの方を処理しないとな」

「俺は？」

「お前みたいなのは比較的楽そうだから後回しだ。それに……」

刑事さんは話をいいところで止めた。『さてさて大事な話はここまで、これから先を聞きたいならどうぞお願いして下さいませ、拍手を下さいませ』とでも言いたいのか。そう、刑事さんの口ぶりはあるで俺からの催促の声を聞きたがっているようだ。そんな子供じみた刑事さんに半ば呆れながらも俺はそれに合わせる。

「それに？」

「それに、変なヤツの調書なんてなんの面白みもないからな。世の中にはもつと面白い事件がうじゃうじゃしてる。なのにそんな簡単になつまらない事件には真つ先に首を突っ込む気にはなれないね」

「そんなもんですかね？」

「ああ、お前には悪意に満ちた動機なんてのもなさそうだからな。だろ？」

「結構鋭いところ突いてきますね。俺には悪意なんて無いし明確な目的も無い。そうですね強いて言うなら犯行の動機は……好奇心ですかね」

「やっぱり変なヤツだな。だが、犯罪なんてもんは得てしてそういう物かも知れねえな」

「理屈なんかより先に罪を犯してしまう、しかし罪に気付くのは全てが終わった後。子供のように罪の快樂に浸ってるだけ。自分でもよくわかりません、罪の自覚だけはあるのにその周りはスラスカつていう」

自分が抱く漠然とした感覚を言葉に現したつもりだったが、どうも言葉が口から出た途端それは全く違うものを感じられる。

「本来だつたら精神鑑定をするべきなんだろうが、お前さんの場合はもつと特別なのもしれないな」

「特別？」

「まあ、いずれわかるさ。とにかく若い時には精いっぱい悩んどけ。悩みたければブタ箱の中でも悩めるからな。好きなだけ頭を使って悩みな」

「悩み続けたら、いつかこのモヤモヤした感覚に答えは出ますかね」

「さあね、それはお前さん次第だ。じゃあな、とりあえず今日は一晩留置場で臭い飯でも食ってくれ」

そう言うつと刑事さんは静かに扉を閉めて取調室から出て行つた。

これで俺の長い長い1日に終止符が打たれたのだが、俺の手元には何も残されていなかった。俺自身の問題は何も解決されていなかった。刑事さんは俺に何か罰を負わせるわけでもなく、ただ『悩め』とだけ言つた。

もしかしたら『悩む』ことが罰なのかもしれない。いや、その罰すらも悩んでいく中で見つけなければならぬのかもしれない。だとしたらこれは最大の罰ではないだろうか。

まあ、いい。俺は悩んで答えを見つける。俺の些細な好奇心がこの罪を生み出したのなら、好奇心を埋めてくれるような罰がもたらされるはずはない。俺は自分を納得させるような罰を探してさまよい続ける。それでいい、それでいい気がする。

窓から吹いてく冷たい風は季節の移り変わりを感じさせる。季節が変わつても、季節が何度も回つても俺は答えを探し続けるんだろう。好奇心の代償は決して軽いものではないはずだからだ。

それでも、時折吹く季節の残り香のような風は俺を温かく包み込んでくれる。

「罪と罰と」完

（後書き）

この作品は2009年4月10日にここで発表した「罪と罰と…」を大幅改編したものです。

当時、諸々の理由から僕はこの作品を最後にこのサイトから姿を消しました。

全てが終わった後、ここに舞い戻ったわけですが中途半端に終わらせてしまったこの「罪と罰と…」がいつもに気がかりでした。

今回、「罪と罰と」という形で発表出来たことを嬉しく思います。

この作品を読んで何を感じるか、何を思うのかは読者の皆さまにお任せします。

罪とは何か、罰とは誰が決めるのか、それは僕にもわかりません。

楽しむ、といった表現は適切ではないかもしれませんが、この作品が誰かの中に何らかの意味を持つてくれることを願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9556/>

罪と罰と

2011年10月5日20時29分発行